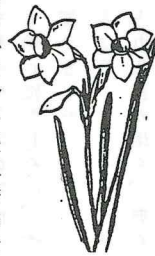


仙台教区報

発行 カトリック仙台司教区
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二一222一七三七一番
 編集・発行人 笹気直哉

首藤正義神父ブラジルへ



一九八八年一月十七日(日)午後二時仙台カトリック元寺小路教会において、パウロ首藤正義神父様のブラジル・サンタレン教会への派遣式ミサが行われた。

晴天に恵まれた当日、約五百人の列席者で聖堂が立錫の余地もないほどにあふれた。

佐藤司教様をはじめ、国際協力委員会からロシャイター神父様、教区各地から二十二名の神父様方が参列し盛大な派遣式となった。

第一部「みことばを受けて」では、福音書の朗読後司教様のことばに続いて、阿部浩さん、佐藤真貴さん(ともに元寺小路教会)から派遣メッセージがあり、首藤神父様を力づけると同時に、「宣教」について参列者にもメッセージとなった。

第二部「主に強められ」では、叙唱、奉献文において「宣教」を意識し、第二奉献文をベースにしたオリジナルな祈願であった。

第三部は「派遣」。拝領祈願の後、司教様から「みことばを宣べ伝えなさい」との言葉を受けながら、ポルトガル語の聖書を手渡さ

れ、続いてロシャイター神父様から十字架が贈られた。最後に、司教様が「首藤神父はブラジルに、皆さんはそれぞれの生活の場に福音を宣べ伝えるために行きなさい。」という派遣の言葉に送られて感謝のうちに派遣式を終了した。

★ 教区からの派遣

派遣式のミサで司教様は、派遣の祝福の言葉をおくるとき、「わたしたち仙台教区民はパウロ首藤正義神父をブラジル・サンタレン教区に喜びと希望をもって派遣します。」と力強くおっしゃいました。

実は、教区から宣教師として、司祭を海外に派遣するということは、日本のカトリック教会において初めての出来事なのです。

修道会の司祭・修道士・修道女の方々はすでにたくさんいらっしゃいますが、教区司祭で、教区から派遣されるということは、日本のどの教区も経験していないことなのです。

この出来事は、仙台教区のみならず、日本のカトリック教会にとって画期的なことと思われまふ。今日まで、人的にも、物的にも海外から援助を受けていた教会が、ようやくお手伝いできるようなったということです。

教区内の各地から、宣教のための祈りと献金がぞくぞくと送られてきました。それは「わたしたちが、宣教師を送るのだ」という強い意思の表れだと思います。この気持ちを今後も持ち続け、第二、第三の派遣につなげていくことが、まさに「開かれた教会づくり」となっていくのではないのでしょうか。

開かれた教会
づくりをめざして

弘前 佐藤 初女

ナイス出席につきましては、皆様から特別のお祈りをいただき有難うございました。

おかげ様で感激一杯で終えることができませんでした。帰ってから、いろいろ質問を受けていますので、それに答える気持ちでお書きしたいと思います。

* 赤い帽子をとった司教様

会議は分団毎に、三本の柱、即ち「社会と共に歩む教会」「生活を通して育てられる信仰」「福音宣教する小教区」を中心に進められ分団として出すべき提案、併せて提案理由なども吸いあげられました。これを更に分団から選ばれた発表者によつて、全体会に発表するのです。この様にして行われた三泊四日延べ三十三時間にわたる会議が最終答申案に結集され、実行委員会を通して司教団に答申する運びとなつたのです。

また、この会議がスローガンに止まることなく、具体的に刷新運動の第一歩をはじめよう宣言し、それぞれの宣教の場に向かいました。ここまですが会議大筋の流れでございますが、私は今回の会議に参加し、先ず感じたことは、司教様方が赤い帽子をとり、立場が違つても同じ信仰をもつ兄弟姉妹として関わつて下さつたことです。今までは考えられない全く新しい体験でしたし、また、ノド

スから帰つたばかりの島本司教様が説教の中で「教会の社会参加は使命であり、政治の福音化は福音の至上命令だ」と言われたことを強調をさいました。新鮮な息吹が伝わつてくる感動の一節でした。

* 共にいきるよこびを

会議の課題は申すまでもなく、開かれた教会づくりですが「先ず社会と共に歩む教会」を取り上げております。何故でしょうか。それは今までの日本の教会はあまりにも社会から遊離していたからで、社会の良心となり、新しい社会を作るために、また、人々と苦しみをかち合うべきであるという強い問いかけがありました。それと共に教区小教区から地域に向かつて開くために、典礼を日本の習慣に合わせるで行う。例えば冠婚葬祭、お盆ミサ、彼岸、七五三、元旦ミサ、厄払い等あげられました。この場合親戚知人を誘いあい、共に生きるよこびを分かち合うのも現代の教会の姿ではないか、また、障害者を対象としたクリスマス、の企画を教会の年間の計画の中に入れてはどうか等も熱心に話し合い、その方向にむかう決意を深めました。

* 工夫してやつてみよう

この様に典礼を広くとり入れた場合、典礼文も未信者にも分かるように、そして親しめるように見直すべきではないかということも出てまいりました。この事に関しては典礼委員会や神学者において見直しに入っているが時間がかかっているのでは、上からのものをまつているのではなく、小教区で工夫して私た

ちが作つていいということでした。私たちが作つた場合本来のものが失われるのではないかと不安もでてきますが、ローマで作つた典礼文にしても、いいものは残るし、ふさわしくないものは自然に消えていくものだから、考えているより、もう始めた方がいいと司教様は私たちに希望を与えて下さいました。また、信徒と司祭の役割の明確化。このことについて司祭は忙しい忙しいと言つて信徒の出来るものまでやつている。信徒は司祭に頼まれて家庭をなげつて働いているのが現実になつているが、実践面から具体的に考え早急に対策を生み出していくのも信徒の私たちにあると思うのです。

以上申し上げましたが、会議の内容をお伝えするにはあまりにも不十分ですが、特に印象に残る、しかもすぐ実践に移られるもの上げてみました。

* 財政の確立を

日本のカトリック史上、初めてと言われる貴重な会議を通して多くの提案が出されましたが、提案実践のかけに財政の裏付けについて信徒の協力が求められていることも心に留めていたいただきたいのです。小教区に於いても財政的の確立が迫られております。

おわりに、画期的な会議が終わつた今、私たち信徒は社会のかかえている諸問題をどの様にふまえ、現代社会の中で福音をまつ人々に応えていくかにかかっていると思うのです。先ず出来ることからはじめ、開かれた教会づくりめざしてすすみたいものです。

私たち一人ひとり
皆のNICE



盛岡 関谷 秀雄

京都の会議から二ヶ月が過ぎました。報告会を何と話したらいいのか、頼まれた原稿をどう書いたらいいのか、私にとってナイスは何だったのか、思いを巡らしています。

すでに答申が発表され、司教団の姿勢が示されました。日本の教会が全体として新しい一歩を踏み出したことは確かです。しかし、「開かれた教会づくり」は一体誰がするのでしょうか。

最後の全体会議で出された答申案の一部に「・・・していただきたい」「・・・お願いしたい」などと、司教団に一切お任せともとれる表現がありました。修正意見が出て「・・・する」と変えられたのですが、ナイスでもこうですから、今まで神父様にオンブにダッコの私たちが、「もの言う羊」になって、主体的に教会をつくっていくことは易しいことではないようです。

* 私がキリストだ

「開かれた教会づくり」を「開かれた私づくり」と置きかえるといくと私は思います。私たち信者は、それ自身教会だと言いますから。すると「あなたは開かれていますか」という問いは、現実の私に厳しく迫ってくるではありませんか。もう声もなく、「いかに開かれていないか」を認めざるを得ません。私

自身の生き方が問われているのです。

分団会の討議の中で、ある神父様が「『私がキリストだ』と考えて生活するのです」と発言されました。「今ここにナザレのイエズスがいらつしやたらどう生きられるか」を心に抱いて生きるという意味だと思います。「キリストのように考え、キリストのように話し・・・」と聖歌でも歌いますが、『私がキリストだ』とは何と一体感のある言い方でしょう。このような生き方をしようとする時、ナイスは遠い京都の話ではなく、私たち一人ひとり皆のナイスになるのではないのでしょうか。

* 対外的な活動は慎重に

さて私は、教会は外に向かって活動すべきだと考えています。しかし同時にそれは慎重に始めなければと改めて思いました。主任神父様が見せて下さったニュースレターの中に京都の藤井さんという方が、次のようなことを書いています。

「対外的な、実践的・具体的な活動をしようとする場合は、十分に慎重であるべきだ。慎重さに欠け、安易であったために、途中でいい加減になってしまいがちだ。情熱をもって始めても、「自分がやらなくても、誰かがやるだろう」と考えたり、面倒臭くなつて放り出したり、勝手に一部の人に「まかせた」ことにしてしまふ。善意で始めても、「ええかげんなことするんやったら、初めからやらんといほしい」という声もある。活動を始めようとする時、「この活動は信

仰の実践だ」とか「福音的なことだ」とか言う

「美しい教会用語」だけに流されてはいけません。その活動を引き受けて、本当に責任をもつて続けていけるのか、充分過ぎる位慎重に検討すべきだ。社会的に弱い立場に置かれた人に対して、「助けてあげる」というようなことを言いながら、途中で勝手に責任を放棄するのは「最も非福音的なこと」だ。V

体験に裏づけられた痛烈な警告だと思いませんか。また自己中心的、一人よがりになっていないかという反省も常に必要だと思います。

教区の意見をまとめる作業の中で、「弱い立場の人々の悩みを聞いてやる」という表現に気持が暗くなったこともありました。

* 勇気をもつて!

外に心に向けていく姿勢は、個人としても教会としても不可欠です。しかし、すぐに何かをしなければということでもないと思います。むしろ、今の自分の生活の中で関わる様々な人と、共に生きようとする時に生じてくる辛さ、不愉快、腹立たしさ、悲しさ・・・そういう苦しみの一つひとつを、勇気をもって受けとめていくことこそ大切なのではないでしょうか。



第一回

福音宣教推進全国

会議に参加して

仙台 宇津木 えつ子



昨年、十一月二十一日、全国会議第一日の正午、仙台教区の代表は元寺小路教会に集まり、聖堂で祈りを捧げ、多くの方々に送られ空路京都に向かった。途中眼下に富士山、日本アルプスが美しく、これから始まる画期的な会議に祝福が送られているかのようであった。

京都着後間もなく午後六時に開会式。会場の京都教区司教座大聖堂は大伽藍を思わせる外観、内陣の白い大理石にステンドグラスの映える壮麗な聖堂であった。教皇ヨハネ・パウロ二世のメッセージ、カルローローマ教皇大使の挨拶に、この全国会議に対する並々ならぬ関心と期待が窺われ、改めて責任の重さに身のひきしまる思いであった。

* 一つの信仰

四日間の会議のプログラムは、この大聖堂で全体会議が開かれた。各教区代表による基調考察、本大会課題の各柱についての発題報告があり、これを受けて十五分団会に分かれての討議と提案事項作成という時間的にもハードなスケジュールである。全体会では仙台教区の佐藤正久さんが「柱1、社会とともに歩む教会」について報告されたが、内容といふ、態度といふ、素晴らしく感銘を受けた。各分団は司教、信徒、修道者、司祭、各教

区の広報担当者、十六〜七名による構成。司祭といっても、教区の、宣教会、修道会の司祭あり、信徒に至っては公務員、会社経営、教師、芸術家、主婦等々、活動分野は多様多彩である。しかもお互いは初対面なのだが、一つの信仰という共通基盤に立ち、次第に連帯意識が深められ、熱心に、真剣に、寒さも食事の時間も忘れて討議した。本音で話そうというので、白柳大司教様の前でつい勝手なことを講つて後で後悔したものである。

* めぐみの四日間

二日目の夕方、宿舍京都ロイヤルホテルの大広間で親睦会があった。代表者だけでなくこの会議を裏で支えた青年書記団も加わり、各教区の催し物もあつて大いに盛り上がり、時間を大幅に超過し、合同夕の祈りを各自やることになった程である。

最終日の午前の全体会では司教団への答申作成に激論がかわされ、午後はカルー大司教主司式による京都教区創立五十周年記念と全国会議感謝と奉獻のためのミサ、同時に地下聖堂ではフォークミサが行われ、会議はすべて終了した。

その後「開かれた教会づくり」の答申案はさらに実行委員等の修正意見を織り込み、正式の「答申」として、白柳大司教に提出されたことは昨年十二月にカトリック新聞に詳細が伝えられている。この答申には仙台教区からの提案が、表現の違いはあるが、大部分が取り入れられている。

この答申の中の各提案について、早くも司

教団は遂条審議し取り組みの姿勢を「ともに喜びをもって生きよう」という小冊子をもって示された。この新しい動きについて、各教会の信徒間には必ずしも浸透していかないように思われる。あの全国会議、めぐみの四日間に感じられた新しい息吹きを多くの方々に伝え、ともに力を尽くしたいと念願している。

司教様の日程

- 2月22日 社会司教委・秘書会合宿(日野)
- 26日 スベルマン理事会 (仙台)
- 29日 教区司祭団月例会 (仙台)
- 3月4日 カリタス・ジャパン
- 5月6日 ボランティア連絡協議会(東京)
- 9日 桜の聖母短大卒業式 (福島)
- 10日 常任司教委 (東京)
- 14日 司祭評議会 (仙台)
- 15日 白百合短大卒業式 (仙台)
- 16日 社会福祉法人理事会 (仙台)
- 17日 カリタス・ジャパン
- 20日 聖ウルスラ会誓願式 (仙台)
- 21日 司牧評議会 (仙台)
- 24日 カリタス・ジャパン
- 25日 マリア会衆日(百周年記念式典) (東京)
- 28日 中央協・機構改革委 (東京)
- 30日 聖香油ミサ・助祭叙階式・選任式
- 31日〜4月5日 聖週間・復活祭(仙台)
- 4月9日 司牧評議員会 (仙台)
- 11日 カリタス・ジャパン
- 14日 常任司教委・カリタスジャパン(東京)
- 28日〜29日 仙台教区修女連研修会

司祭生涯養成研修会

笹 氣 直 哉

日本カトリック司教団による、司祭生涯養成研修会が一月十七日(日)午後から三十日(土)正午まで、鎌倉のイエズス会黙想の家で行われました。

昨年のナイス答申の柱1提案2において、「信徒、修道者、司祭、司教のための生涯養成を確立する。」それも、常設の生涯養成制度として確立するよう提案されています。

こうしたことを背景にして、参加者二十五名は二週間という長い研修を行いました。ちなみに、平均年齢四十九才といえますから、日本全体の司祭の平均からすると若い年齢かも知れません。

研修会全体のテーマは「小教区」でした。小教区の現状、新教会法、教会史、シノドスにおける司祭と信徒、ナイスによる開かれた教会づくり、信徒の発見、司祭の体験、これからの小教区、以上のことについて、ひとつひとつ一日がかり、二日ばかりで研修しました。

教会の歴史から

小教区制度が歴史の中で、どのような経緯をとってきたのかをふりかえってみると、あくまでも司牧のための制度であったことが浮かび上がってきます。この性格を宣教共同体にしていくには、相当の意識の転換が必要と

なります。また、いわゆる新大陸発見の時代から宗教改革の時代を経て、トリエント公会議に至る変動の歴史の中で、教会が社会に対してどのような対応をし、何を大事にしたのかをみると、第二バチカン公会議の位置付けひいては昨年のナイスの意味が次第に明確な表情となって表れてきます。

研修者の共通理解として

まず、常に司祭は信徒と共に考え、共に歩むこと。それは、現在の教会が大きな転換期に直面しており、その転換のひとつのしるしとしてナイスの意義を確認し、「ともによろこぶ」の精神がこのことを明確にしている。

また、これを実践していくためには、何よりも司祭自身が心を開き、発想の転換をしていくことが大切で、そのためにも司祭の養成は最優先の課題であると考えます。

そして、ひとりひとりが宣教師となっていくには、原点に立ち戻り、初代教会の姿に学ぶことが何よりも大切である。

最後に、以上のことを推進していくとき、あせらず、無理をせず、歩みの遅い人、いろいろのタイプの人のベースを尊重しながら、ともに歩むこと、また、規則やたてまえよりも、その場の人々の必要にそって考えることを確認した。

組織は、できる人・はやい人・成績のいい人を基準にするが、共同体というものは、その反対の人を基準にするという教会共同体にとって、とても大切な共通理解をもって平和の挨拶をしつつ帰途についた。

カテドラル検討委員会が発足

老朽化してきた現在のカテドラルに替わる新しいカテドラルの建設は、仙台教区にとって長年の懸案であるが、昨年の年頭司教書簡と共に、準備委員会によって作成された「仙台カトリック・センター(仮称)新築構想」が発表された。

このことが司教評議会等で審議されたが、佐藤司教は「建設委員会」を設置する前に、あまり長い期間ではないにしても、もう少し時間をかけて教区民の合意を得る作業が必要と判断し、その仕事を司教総代理を中心とする「カテドラル検討委員会」に委ねた。

カテドラル検討委員会は信徒6名、司祭3名、修道者1名で構成され、今、すでに一月16日と23日の2回開催された。カテドラル検討委員会の仕事の内容は、カテドラル及びセンター(仮称)を具体化するにあたって、場所や規模、そのために必要な資金調達方法などに関しても、教区民が望んでいることを要約しながら、合意できる線を見出すことである。今後この委員会より、広く教区の皆様のご意見を聞くこととなりますが、皆様の積極的なご協力をお願い致します。

「編集後記」NICEそのものの出来事も大事なことだった。もつと大事なことは、これから実際にやっていく事でしよう。(笹)